

## 平成23年度第1回特別支援教育保護者研修報告

- 1 日時 平成23年8月23日（火）10:00～11:30
- 2 場所 江別市市民会館 2階21号室
- 3 演題 「障がいを持つ子との上手な接し方」
- 4 講師 北海道南幌養護学校教諭 中嶋雅子 氏
- 5 参加者数 保護者70名、放課後児童会職員20名、教職員19名、その他7名  
合計116名

### 6 講演概要

- ・ みなさんおはようございます。南幌養護学校の中嶋です。昨年と似たような話も半分くらいあると思いますが、復習の意味で聞いて下さい。
- ・ はじめに、発達障害について、「発達凸凹」+「適応障害」があって初めて発達障害になる」（杉山登志郎著『発達障害の子どもたち』）と書かれているが、私もそうだなと思う。
- ・ 「発達凸凹」があるお子さんでも、将来的に社会に適応していけばよいと思う。
- ・ 幼児期にADHD、小学校に上がって勉強が始まったらLD、高学年になってアスペルガーというように診断が変わっていくこともある。同時期であっても、医者によって診断名が違うこともある。
- ・ 「障害名ではなく状態像から対応を考えること」が大切である。
- ・ その時に「知識」と「想像力」が武器になる。この子はこうかもしれないという「想像力」を働かせることが大事である。
- ・ 子どもと接していて、困ったことがあったときには、背景を考える。必ず理由があるはずである。
- ・ 「～かもしれない」と考えることが大事だが、それを見つけるためには「知識」が必要。
- ・ 例えば、授業中姿勢が崩れている子がいると、「怠けている」「だらしない」「やるきがない」と思いがちだが、別の背景があるかもしれない。「ちょっと違うかもしれない」と考えてみるのが大事である。
- ・ バランスの崩れを感じ取る感覚（前庭覚）や身体の筋肉の入れ方や関節の動きを感じ取る感覚（固有受容覚）が上手く働いていないのかもしれない。
- ・ これは、感覚統合（感覚情報の適切な交通整理がされることによって適応行動をつくりだす）の考え方である。
- ・ この考え方を「発達の木」として表した図がある。聴覚、視覚、嗅覚、触覚、前庭覚、

固有受容覚等の感覚が、木の根になる。

- ・ 根がしっかりしていないと、枝や葉である小学校に上がってからの勉強は身につかない。根や幹がしっかり育っていることを前提に小学校の勉強が作られている。
- ・ 根や幹をしっかり育てるためには、身体を使った遊びや運動が大切である。
  
- ・ 「集中力がない」「話を聞いていない」という相談も多い。
- ・ その背景としては、「一度にたくさんのことを言われても覚えられない」「聞くだけでは理解できない」という背景があるかもしれない。
- ・ 知的障害がなくても「聞くことがすごく苦手」という子もいるし、反対に「見るのが苦手」な子もいる。
- ・ 学校の授業では「聞く」ということが重要である。
- ・ 「聞く」ことが苦手な子は学習で大変な思いをしていると思う。
- ・ どうせ聞いても分からないから「聞かなくてもいい」と思うようになる子もいる。
- ・ そういう場合は「視覚支援」が大事になる。
- ・ スケジュール表や、絵や写真で示してあげることも大事である。
- ・ 「一回の指示では一つのこと」「短い言葉で」を意識することも大切。
- ・ 話を聞くだけでは、正しく理解できない子には「コミック会話」（簡単な絵と吹き出しによって状況を視覚的に理解しやすくする。キャロル・グレイが提唱した方法）も効果的な場合もある。
  
- ・ パニックを起こすケースは、「予想外の変化に、強い不安や恐怖を覚える」「感覚の過敏さによる身体の拒否反応」「俺ルール（自分の勝手な思い込みで作ってしまったルール）が破られた」などの背景があるかもしれない。
- ・ 「予想外の変化に、強い不安や恐怖を覚える」について。たとえば、靴箱が変わる、教室が変わる、先生がかわるなどで、パニックになる子もいる。そのような子には、予告と承認が必要である。
- ・ 「感覚の過敏さによる身体の拒否反応」がある子は、能動的に触覚体験をする遊びをしたり、子どもに受け入れられやすいマッサージをすることなどで軽減される場合もある。
- ・ 「俺ルールが破られた」。たとえば、一度、雨の日に体育館でドッジボールをしたことで、それが俺ルールになってしまったという例がある。その子に対しては、雨なのにドッジボールをしないときや、晴れているのにドッジボールをしたときにパニックになっていた。雨の日に体育館ですることは他にもあるということ、ドッジボールはどんな天気でもすることがあることを文章で書いて示したら、理解しることができてパニックがなくなった。
- ・ 言葉だけで言われても理解できず、「わがままな子」だと勘違いされるケースがある。

- ・ 一回、「いやなんだ」「そう思ったんだ」と認めただけで、説明してあげることが大事である。
- ・ ゲームに負けるとパニックを起こしてしまう子に、そのたびに「勝つこともあれば負けることもある」と、淡々と言い続けることによって、負けてもパニックを起こさなくなったという例がある。その子は、そうなるまでに5年かかった。長い目で見ることが大事である。
  
- ・ 「読み書きが苦手」という子の中には、知的な障害や視力の問題ではなく、「見る力」に問題がある子もいる。
- ・ 「見る力」とは、視覚情報を脳に入れたり、脳で処理する機能である。
- ・ そういう子には、マルチメディアDAYSY版教科書も効果がある。
  
- ・ 「困った子」ではなく「困っている子」として理解することが大切。
- ・ 「適切な対応・環境作り」と「その子自身の力を高めること」の両方が必要である。
- ・ 「セロトニン5」（平山諭著『発達障がい児の授業スキル』）
  - 見つめる・・・優しい表情で
  - ほほえむ・・・口角を上げて、優しい目で
  - さわる・・・手をつなぐ、頭をなでる、肩に手を置く
  - ほめる・・・笑顔で、明るい声で、顔を見て
    - 事実をほめる
    - 探してでもほめる
    - すかさずほめる（失敗する前に）
    - （苦手なことは）やろうとしたらほめる
- ・ どんなに障害の重い子でも絶対に成長する。